

第2節

「学習内容表」の作成と活用

1 「学習内容表」の作成

(1) 「学習内容表」の作成に向けて

ア 作成の背景

カリキュラム・マネジメントに係る各計画等を作成する際に、使用するためのツールとして、「学習内容表」を作成することとした。「学習内容表」とは、各教科の内容を系統的に示したものであり、今期研究においては、学習指導要領の各教科に記述された目標や内容を解釈し、内容を系統的に配列して一覧表として示した。「学習内容表」を作成することとなった背景としては、前期研究の課題〔表－8〕として以下のような意見が上げられていたからである。

〔表－8 「学習内容表」作成の要因となった前期研究の課題〕

- ・各教科等を合わせた指導の目標設定を各教科等で行うようになったものの、各教科の見方・考え方に習熟していないため、指導内容及び目標の設定が難しい。
- ・現在の学びを今後どのようにつなげていくかを考える際の参考になるものが欲しい。
- ・個別の指導計画の目標設定を各教科で行うことについては定着してきたが、個別の指導計画では、習得を目指したいことの中心的なものしか記入しないため、年間指導計画に上げる指導内容や単元計画での目標設定の際に、参考とするために別の指標が必要である。
- ・これまでも学習指導要領の内容や解説を読んで対応してきたが、小学部・中学部・高等部の内容が一覧表になっているものがあると使いやすい。
- ・小学校、中学校ではどの児童生徒も一律にその年度に学ぶべき指導内容は決まっているが、知的障害教育においては、一人ひとり異なってくる。それを把握するためのツールが必要である。

以上のようなことから、今期研究では、「学習内容表」の作成に取り組み、教師が指導内容を設定するための参考とするとともに、児童生徒一人ひとりの習得の状況を把握するための「学びの履歴」として活用することとした。

イ 作成の目的及び期待される効果

「学習内容表」の作成にあたっては、まず、教師間で目的及び期待される効果〔表－9〕を共有した。

〔表－9 「学習内容表」の作成の目的及び期待される効果 〕

- ・教師が、協働して学習指導要領で示される各教科等の目標と内容を読み込み、解釈を深めながら系統的に配列する作業を通して、各教科等の見方・考え方に習熟できる。

- ・教師が、各教科等に関する専門性を深めることによって、各教科等に関する児童生徒の実態把握を適切に行うことができるようになる。
- ・適切な目標を設定し、目標を達成するために有効な教育計画を行うことができるようになる。
- ・作成した「学習内容表」については、個人の目標設定や授業作りを行う際に活用し、その根拠とすることができる。
- ・「学習内容表」の文言を教師間の共通言語とすることで、児童生徒の実態や目標を共有しやすくし、授業内のチームティーチングをより有効化することができる。
- ・「学習内容表」で示された文言や文章表現を活用することによって、年間指導計画や単元計画の作成の効率化を図ることができる。
- ・「学習内容表」を用いて、児童生徒一人ひとりの習得状況をチェックし、それを毎年積み上げることによって「〇〇さんの学びの履歴」とし、その作成によって、児童生徒の各教科等における実態把握の一助とし、次に取り組むべき内容を選定することに生かすことができる。

(2) 「学習内容表」の作成の実際

研究の1年次（令和2年度）は、「生活（小学部）」「職業・家庭（中学部）」「職業（高等部）」「家庭（高等部）」「社会（中・高等部）」「理科（中・高等部）」「国語」「算数（小学部）・数学（中・高等部）」の8教科について学習内容表を作成した。研究2年次（令和3年度）は「音楽」「図画工作・美術」「体育・保健体育」の3教科について学習内容表を作成した。

このうち、小学部生活の内容については、

- 小学部生活－中学部職業・家庭（職業分野）－高等部職業
- 小学部生活－中学部職業・家庭（家庭分野）－高等部家庭
- 小学部生活－中学部社会－高等部社会
- 小学部生活－中学部理科－高等部理科

というつながりで編成を行い、作成することとした。

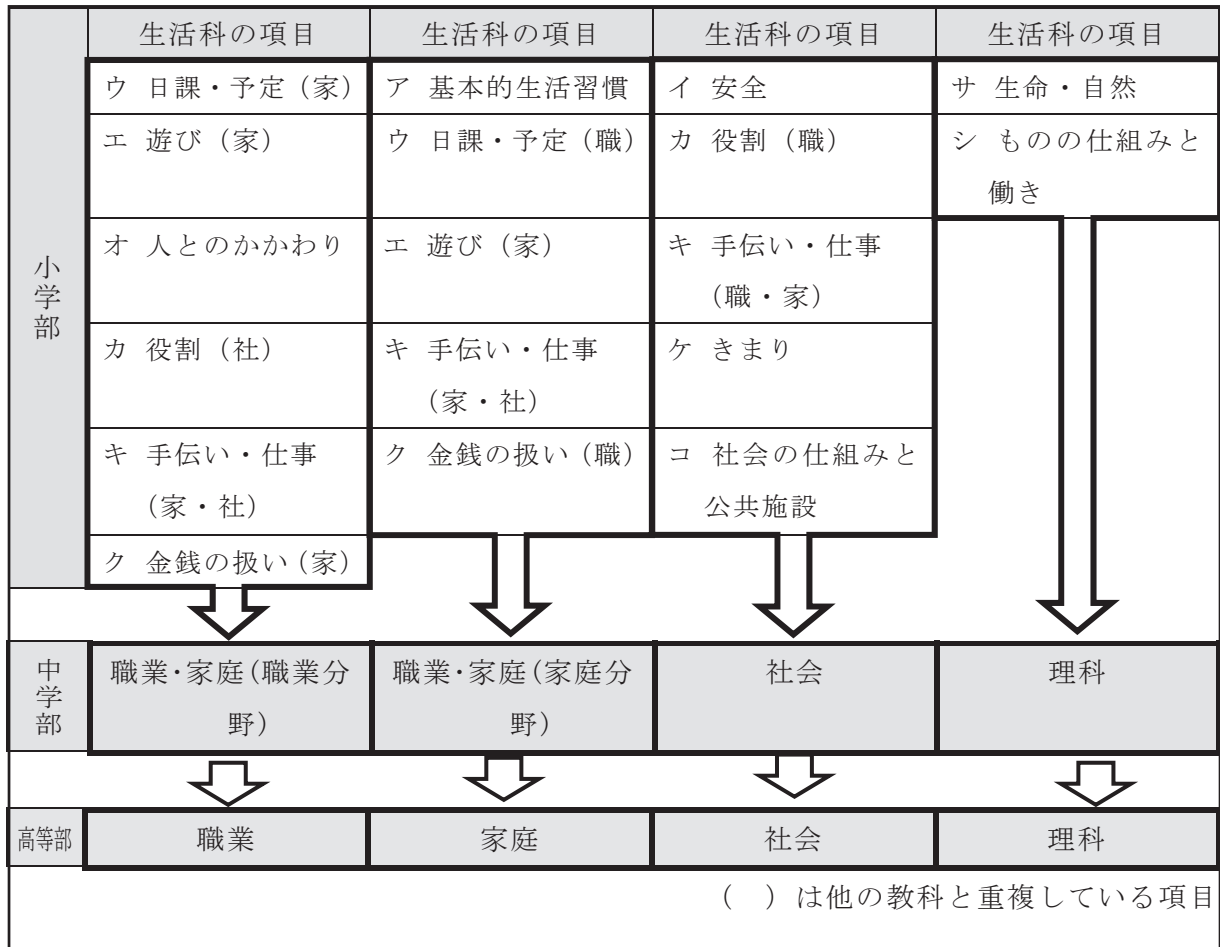
本校では前期研究から引き続き「児童生徒の確かな学びをつなぐ」というキーワードで研究を進めていること、また、学習指導要領の小学部生活科の解説にも「各教科との関連を図り、指導の効果を高めるようにするとともに、中学部の社会科、理科及び職業・家庭科の学習を見据え、系統的・発展的に指導できるようにすること。」と記述されていることから、児童生徒の実態に応じて、一人ひとりに適切な目標を設定する時の考える基盤となるのではないかと考えた。

作成にあたっては、以下の手順で進めた【表－10】。

〔表－10 学習内容表作成手順〕

- 1) 基本の様式の設定
- 2) 学習指導要領に示された各教科の目標の読み込みと段階の違いの理解
- 3) 学習指導要領に示された内容の段階や項目ごとの内容の読み込み
- 4) 「学習内容表」の様式に沿っての項目の検討
- 5) 学習内容の記入，推敲

1年次は表に示した手順に沿った取組に先立って，小学部生活について，中学部・高等部の各教科の内容とのつながりを検討し，「ア 基本的生活習慣」～「シ ものの仕組みと働き」の生活科の各項目について，中学部・高等部の各教科への振り分けを行った〔図－21〕。結果として，生活科の各項目はそれぞれ中学部の各教科に分かれて組み入れられているのではなく，1つの項目がいくつかの教科に重複して組み入れられているものも出てきた。例えば，「キ 手伝い・仕事」は，中学部「職業・家庭（家庭分野）」，「職業・家庭（職業分野）」及び「社会」に重複している。



〔図－21 小学部生活科の項目の振り分け 〕

生活科は内容が幅広く、中学部以降の日常生活、職業生活、社会生活に関する各教科の学びの土台となる内容を取り扱っているために、今期研究の段階ではこのような振り分けに留まったが、今後、個別の指導計画における目標設定と評価の状況等の分析を経て見直し、本校における教育課程上の位置づけとして整理していきたい。

生活科の中学部、高等部への内容の接続を検討した後に、それぞれのグループで、「学習内容表」作成に向けた検討を進めることにした〔図-22〕。小学部、中学部、高等部と12年間を通した内容を検討することから、グループ編成は学部縦割りとした。すべての学部・段階に全員で目を通した上で、他学部の教師と話し合うことで、教科の内容の系統性や学部の段階をイメージしやすくなったと考えるとともに、学部間のつながりを一緒に考えながら連携を図ることができた。



〔図-22 「学習内容表」作成グループでの検討の様子〕

「学習内容表」の基本の様式〔表-11〕を表計算ソフトで作成し、作成グループで項目や下位項目、さらに下の項目（下下位項目）を設定し、セル内に学部段階・項目ごとに学習内容を記入するようにした。

〔表-11 「学習内容表」の基本の様式〕

（ ）科 小学部			（ ）科 中学部			（ ）科 高等部		
項目	下位項目	下下位項目	項目	下位項目	下下位項目	項目	下位項目	下下位項目
	小学部1段階	小学部2段階		小学部3段階		中学部1段階	中学部2段階	
								高等部1段階
								高等部2段階

できるだけ統一性のある「学習内容表」の作成を目指したが、学習指導要領では、教科ごとに項目の配列が異なっており、内容の具体性にも差が見られるため、それをベースに作成した本校の「学習内容表」においても、差異が見られた。

なお、研究2年次は、1年次と同様の手順で、残る「音楽」「図画工作－美術」「体育－保健体育」の「学習内容表」作成に取り組んだ。

(3) 各教科の「学習内容表」作成における検討

「学習内容表」については、2年間をかけてグループ協議による検討・作成に取り組み、グループ案が完成したところで、1年次、2年次の2回、全体研究会において報告を行った。

作成した「学習内容表」の概要説明や、作成の経緯、学習内容表の配置等の工夫点、教科の見方・考え方についての考察などが報告された〔図-23〕。

報告会での、各グループからの報告内容についてまとめた。



〔図-23 全体研究会での報告の様子〕

ア 生活－職業・家庭（職業分野）－職業の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループでは、目標の読み込みの際に、まず、中学部・高等部の教科の項目分けに注目した。中学部職業・家庭（職業分野）と高等部職業については、「A 職業生活」、「B 情報機器の活用」、「C 産業現場等における実習」という3つの項目が全く同じであるため、そのままつながりをもたせられた。その項目に、小学部生活科の各項目で、職業（分野）の内容とつながりがある項目をピックアップし、さらにそれらが職業のAからCのどの項目または下位項目とつながりがあるのかを考えて、一覧表に配置した。その中で、生活科の「エ 遊び」と「キ 手伝い・仕事」については、それぞれ中学部・高等部の「A 職業生活」、「B 情報機器の活用」、「C 産業現場等における実習」のうち2つの項目と関連があると考えたため、両方に配置することとした。

例えば、小学部生活科の「エ 遊び」は、「余暇」へのつながりから検討を進めた。余

暇に関する内容は、中学部職業・家庭の(職業分野)については、解説中に「余暇を有意義に過ごすこと」との記載があり、高等部職業には、学習指導要領中に余暇に関する内容がある。そこで、生活「エ 遊び」を、高等部の職業の余暇の項目と同じ段に配置し、中学部の欄には解説中の記述を注意書きとして抜粋して掲載することとした。

次に、項目ごとの内容について検討を行った。

中学部と高等部については、上述のとおり「A 職業生活」、「B 情報機器の活用」、「C 産業現場等における実習」の3つの項目でつながりがあり、高等部の方が、より将来をイメージした発展的な内容を示すような表現となっていた。

例えば、「A 職業生活」の内容の項目について、中学部では「働くことの意義」であるが、高等部では、「勤労の意義」となっている。その内容についても、「A 職業生活」の内容は、中学部第1段階では、「職業生活に必要な知識や技能について“知ること”」から、中学部第2段階では「理解すること」となり、高等部第1段階では「実践的な」が加わり、「身に付けること」、高等部第2段階ではさらに「深め」が加わり、「技能を身に付けること」となっている。このように、学習指導要領の内容そのものの記述を丁寧に解釈しながら一覧表として作成した。

次に、実際に本校で運用していくために、どのようにまとめるべきかを検討した。その際、「誰が見ても(読んでも)活用できるように分かりやすい表現にする。」ことをコンセプトとして協議を行った。

そこで、学習指導要領解説にある多くの詳しい解説や活動例を網羅的に生かすよりも、できるだけシンプルな表記になることを心がけ、学習指導要領の内容の表現だけで内容を捉えることができるものについては、文言を変えずにそのまま記載することとした。一方で、小学部の生活科から、中学部・高等部の職業関連の内容につなげる視点で整理した場合、学習指導要領の記述そのままでは分かりにくい表現があったため、解説の内容を参考にして説明を加えたり、文言を変更したりした。

この方法をとる場合は、授業作りに活用する際に、学習内容表の内容について、学習指導要領解説を再度読み込む必要があるだろう。

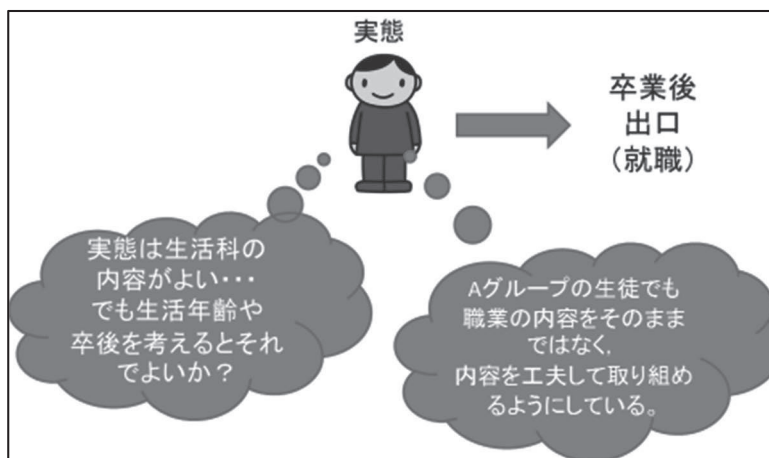
グループで出た意見・考察等

学習内容表を、児童生徒への指導・支援にどのように生かしていくかについては、本校児童生徒の実態を踏まえることが不可欠だが、中学部職業・家庭の職業分野や高等部の職業における内容は、生徒の実態と照らし合わせて考えたときに、かなり高度な内容を学ぶことになるのではないかという意見もあった。

例えば、本校高等部では、職業を教科別の指導として時間割に位置付けているが、現実的には、高等部職業の内容は難しく、中学部職業・家庭の職業分野の2段階、1段階に代替することも少なくない。さらには、実態から考えると中学部段階でも難しい生徒もいる。グループではその場合も想定し、小学部生活の内容を取り上げ、生徒の実態に合っ

た指導内容にできるように内容表を作成した。しかし、高等部では、生徒の実態が小学部段階相当でも、生活年齢や卒業後の進路や生活を考えた時に、職業科の内容を取り上げる方が適切ではないかという意見が出てきた。

現在、小学部段階相当の高等部生であっても、多くは、中学部で作業学習を経験し、職業に関する内容を学んできていることを踏まえ、高等部職業の教科別の指導では、学習集団を実態ごとに3つの縦割りグループにし、将来の卒業後の生活を想定した指導内容を設定している。卒業後は生活介護事業所のサービ

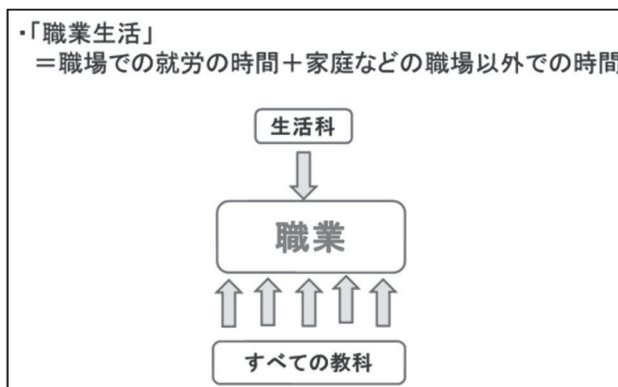


〔図-24 高等部在籍生徒における職業科の指導内容の考え方〕

スを利用する可能性が高いと考えられるグループでは、実態として小学部段階ではあっても、小学部生活科の内容で対応するのではなく、中学部職業・家庭の職業分野や高等部職業科の実習や卒業後の生活を想定した指導内容が必要であると考えた。そこで、実際の授業でも、職業の目標や内容そのままを授業で取り組むことは難しくても、生徒の実態に合わせて指導内容や活動内容を工夫して取り組めるようにしている。結果として、高等部職業を教科別の指導として取り組む場合は、生徒の実態としては下学部代替の段階であっても、小学部生活まで広げて取り組むことは適切ではないと考えた〔図-24〕。

このように、学習内容表の作成に加え、自分たちの実践の状況を振り返ることで、小学部段階の生活科の学びが、中学部や高等部の学びにどのようにつながっていくかについて、改めて考えることができた。小学部段階でどのような資質・能力の育成が必要か、また、小学部生活の内容からどのように職業の内容へ移行していくか、計画的な連携を図らなければならない。

また、本グループでは、中学部職業・家庭の職業分野及び高等部の職業の中で何度も出てくる、「職業生活」という文言について検討した。「職業生活」を、職場での就労と、退勤後の家庭などの職場以外での場所で過ごしている時間も含めた、1日の生活全体と位置付けた。つまり、卒業後の社会参加



〔図-25 職業生活を支える各教科との関連〕

に向けては、職業科は、非常に重要な教科であり、今回取り上げなかった小学部生活科の全ての項目や、他の教科の全てについても、本教科と総合的に関わりがあると考えた〔図-25〕。その点では、職業科の内容を、各教科等を合わせた指導、特に作業学習において中心的に取り扱うことが有効ではないかとの意見が上がった。知的障害特別支援学校においては、職業科の内容を取り扱い、職能や態度・姿勢を身に付けるために作業学習の指導形態があり、本校も、中学部・高等部合同で取り組んでいる。教科としての職業科の内容を充実させるには、作業学習の在り方を改めて考える必要がある。

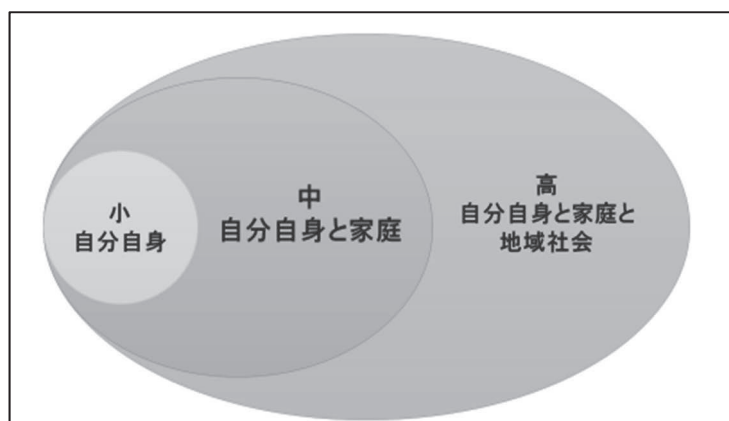
今後、教育課程を検討する際に考えていきたい。

イ 生活－職業・家庭（家庭分野）－家庭の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

まず、学習指導要領解説にある生活科－職業・家庭（家庭分野）の目標の読み込みから、学部－段階の解釈に取り組んだ。

小学部では、「人の存在，社会の仕組み，自然の存在に関心をもつ」「自分の身の回りの生活において必要とされる基本的な習慣・技能を身に付ける」「周囲に物，人，自然があることに気づく」「自分以外の事象があることを知る」ことが目標として挙げられており，主として「自分に気付くこと」というテーマが中心であると捉えた。



〔図-26 生活－職業・家庭（家庭分野）－家庭における各学部の中心テーマ〕

次に，中学部では，「家庭と自分の関係に気づく」「体験や実践をしながら自分の役割を理解する」「家族や地域の人々とのやりとりを通して，よりよく物事を成し遂げることができる」ことが目標に挙げられており「家庭と自分の関係に気付くこと」というテーマが中心であると捉えた。

最後に，高等部では，「家族・家庭の機能や，生活の自立に必要な家族・家庭，衣食住，消費や環境等についての基礎的な理解を図り，それに係る技能を身に付ける」「家庭や地域における生活の中から見いだした課題を解決する力を養う」「家族や地域の人々との関わりを通して生活を工夫しようとする」ことが目標に上げられており，「小・中学部で育成された資質・能力を生かし，地域社会と関わる力を身に付けること」というテーマが中心であると捉えた。学部・段階を追うごとに，周囲との関わりが自分自身から家庭や地域社会へ広がっていく形で成長を促している目標であることが分かった。

〔図－26〕。

次に、「学習内容表」の作成にあたっては、項目をさらに分類する下位項目とその内容の検討を、3つの点に留意しつつ学習指導要領の各教科等の解説を読み込みながら進めた。

1点目は、学習指導要領の解釈との差が生まれないようにするために、学習指導要領に記載されている用語を下位項目として設定した点である。例えば、学習指導要領の小学部生活科「基本的生活習慣」には、「食事・用便・清潔・身の回りの整理・身なり・寝起き」という記載があるため、それをそのまま下位項目として起こした。

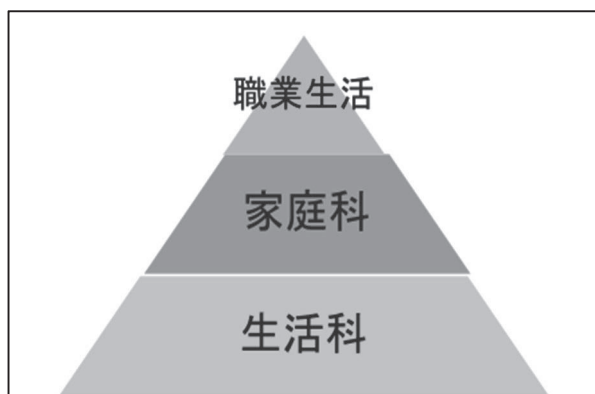
2点目は、内容が詳細になりすぎないように、「指導の留意点として～」、「～についての学習では」、「例えば～」などの書き出しで始まる内容についてはできるだけ割愛した点である。

3点目は、担当している授業や児童生徒の目標として設定するのにふさわしい文言であるかどうか、また、個別の指導計画の目標として活用がしやすいかどうかの視点から、項目や内容を設定した点である。

作成方法としては、下位項目ごとに小グループに分かれ、学習指導要領解説を参考に内容を検討し、それらを合わせて一覧とした。全体を概観した上で、小学部から中学部、中学部から高等部へのつながりを線で結んで明示した。例えば、小学部生活科の「手伝い・仕事」では、「手伝い、整理整頓、戸じまり、掃除、後片付け」の5つの下位項目を設定したが、その中で、「手伝い、掃除、後片付け」は中学部「A 家族・家庭生活」へ、「後片付け」が「C 消費生活・環境」へ、そしてすべての項目が「B 衣食住の生活」につながっていると考えた。

グループで出た意見・考察等

学習指導要領には、段階が上がるにつれ、取り扱う内容が多岐に渡って記載され、抽象的な表現も増えるため、それを参考に内容を設定していく際には、簡潔にまとめることの難しさ、学部間のつながりを明確にすることの難しさ、表記内容の違いの解釈の難しさがあった。具体的には、「工夫する」「表現する」「気づく」から想起する児童生徒の学習の様子や育ちの姿は多様であり、イメージも担任一人ひとりで異なることがある。他にも、段階が上がると、文末の文言が「知り」から「理解し」に変わるのが、どういう成長を示しているのかを整理し、学部を超えて共有する必要がある。



〔図－27 小学部生活科・中学部職業・家庭（家庭分野）、高等部家庭と職業生活の関係性〕

最終的に本グループでは、小学部の生活科を基盤として、集団や内容がステップアップしていき、職業生活につながっていると整理した〔図-27〕。

それを踏まえ、今後の取組に向けての意見として、

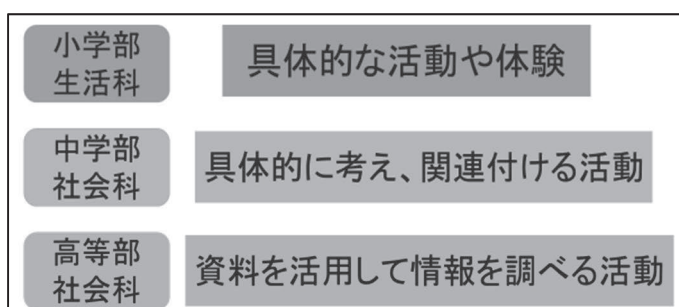
- 小学部の生活科の内容を分類するためには、中学部や高等部の目標内容の読み込みを十分にする必要性を感じた。
- この取組を通して、小中高のつながりが見えてきた。これまでの児童生徒への指導支援の中で、なんとなく行ってきたことについて、その目的や必要性について再確認することができた。
- 取り扱うべきとされる内容と、児童生徒の実態の違いを感じた。
などが上がった。今後、教育課程への検討ともつなげながら、日頃の実践に生かしていきたい。

ウ 生活－社会の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループでは、まず、小学部の生活科と中学部、高等部の社会科の目標のつながりを検討したが、目標については小学部、中学部、高等部で、「社会の一員としての資質・能力を育成する」といった点で共通していることが分かった。

次に、どのような学習を通して資質・能力を育成するのかという点で検討し、小学部・中学部・高等部の段階の違いを確認した。小学部生活科では、「具体的な活動や体験を通して」、中学部社会科では、「具体的に考え、関連付ける活動を通して」、高等部社会科では、「資料を活用して情報を調べる活動を通して」、それぞれ資質・能力を育成すると示している。つまり、「具体的な体験」によって学ぶことから、その積み重ねをもって「学んだことを関連させ」、関連付ける学びを通して、「資料の活用や情報の調査」へと発展していく流れになっていることが分



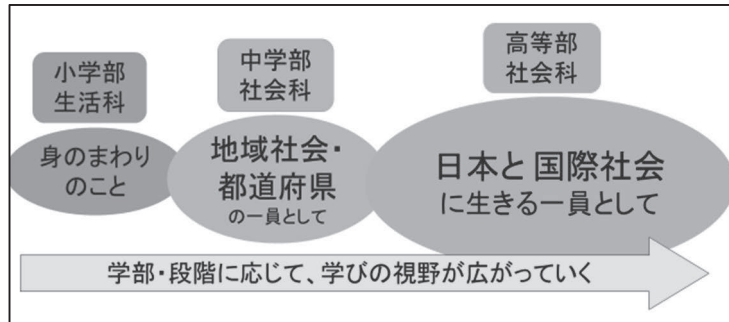
〔図-28 どのような学習を通して資質・能力を育成するのか〕

かった〔図-28〕。さらに、小学部・中学部・高等部のつながりとして、学習の展開に注目すると、学部や段階が上がるに従って、学習の中で目を向けて学ぶ範囲が、「身のまわりのこと」から「地域社会」へ、「都道府県」から「日本と国際社会」へ、と広がっていく構造になっていると解釈することができた〔図-29〕。

内容表の作成に取り組むにあたっては、まず小学部・中学部のつながりを整理する必要があると考えた。そのため、初めに小学部生活科の内容で、中学部社会科の内容へと

つながっていく項目を確かめて整理する作業を行った。

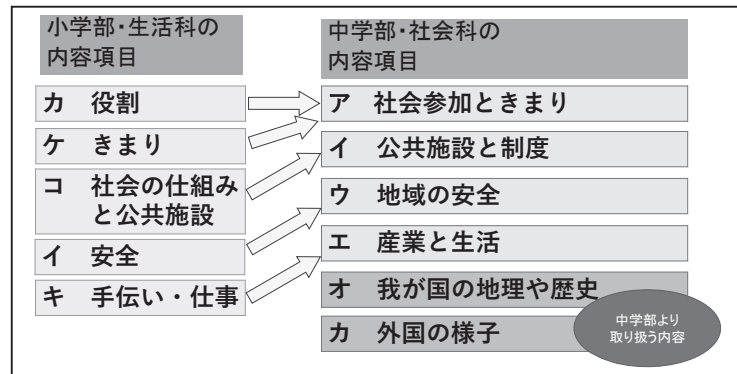
中学部社会科の項目は、「ア 社会参加ときまり」「イ 公共施設と制度」「ウ 地域の安全」「エ 産業と生活」「オ 我が国の地理や歴史」「カ 外国の様子」6項目だが、小学部生活科



〔図－29 小・中・高の学習の展開〕

の内容項目から「カ 役割」「ケ きまり」は中学部社会の「アへ」、「コ 社会の仕組みと公共施設」は「イへ」、「イ 安全」は「ウへ」、「キ 手伝い・仕事」は「エにつながっていると捉えた。中学部「オ 我が国の地理や歴史」「カ 外国の様子」については、中学部より取り扱う内容であるとまとめた〔図－30〕。

次に学習内容表の表記について検討した。学習指導要領の社会科の内容については、どの項目においても「〇〇に関わる学習活動を通して次の事項を身に付けることができるようにする。」と書かれており、㊦として「知識及び技能」㊧として「思考力、判断力、表現力等」の順に書かれている。



〔図－30 小学部生活と中学部社会とのつながり〕

小学部の生活科に関しては、㊦として「思考力、判断力、表現力等」㊧として「知識及び技能」と、中学部とは順番が逆に書かれている。そこで、学習内容表では学部のつながりを重視し、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の順に表記することとした。

さらに、中学部の㊦「知識及び技能」の具体的な記述を見ると、例えば、「文化の風習の特徴や違いを」までは同様の記載で、1段階では「知ること」2段階では「理解すること」と、実際に取り扱う内容が分かりづらい表記になっていたため、「学習内容表」では、解説を基に内容の違いが分かるよう整理して表記した。また、項目「カ 外国の様子」の下位項目「世界の中の日本と国際交流に関わる学習活動を通して」のうち知識及び技能にあたる「世界の中の日本と国際交流」について、学習指導要領の解説から中学部1段階、2段階の違いが分かるように取り出し、中学部1段階を「世界の国のうち1カ国から2カ国を選んで、生徒の生活に関係の深い題材を取り上げること」、中学部2段階を「日本と他の国との大まかな違いについて分かる。」と記載した。他の部分についても、

取り扱う内容が分かりやすくなるよう意識して作成した。本グループでは、このように、中学部の内容表を作成した後、改めて小学部から中学部へのつながりを意識して、小学部の内容表の再整理を行った。

高等部の内容の項目は、中学部と関連して配置した。内容の表記は、中学部と同様に分かりやすくなるよう、解説の表記内容を基に工夫して作成した。

エ 生活－理科の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループではまず、学習指導要領に示された内容を把握するところから取り掛かったところ、生活の「生命・自然」「ものの仕組みと働き」及び中学部・高等部の理科の内容は、小学校3年生から6年生までに学ぶ内容が、中学部1段階から高等部2段階までに散りばめて配置されていることが分かった。よって、「学習内容表」として作成した場合、その下の段階や上の段階では扱うのに、ある段階では扱わないという内容があり、表中に空白になっている部分も出てきた。他教科では、「1つの項目について段階ごとに発展させて学ぶ」という系統性が重視されているが、理科では、在学期間に扱う「領域」をどう配置するのかを重視した内容となっているからであると捉えた。また、学部－段階ごとの目標について、表記の違いはあるが、中学部から高等部までのどの段階でも、「理科的な見方・考え方を育成する」という本質は変わらないと感じた。

次に項目や下位項目の設定を行った。小学部生活のうち、「自然・生命」「ものの仕組みとはたらき」の2つの項目から中学部、高等部へのつながりを意識して学習指導要領の読み込みを行った後、取り扱う領域の多い高等部を基準にして検討を進めた。高等部に示された領域の項目と同領域の項目は、中学部のどこに配置されているのか、また小学部生活科のどの項目が関連しているのかを確認し、一覧にする際の配置を考えた。その中で、生活科「生命・自然」の下位項目が、中学部の「生命」と「自然」のどちらにつながるか検討したが、どちらの内容も深く関連し合っていることから、この2つを振り分けずに配置することとした。

次に項目や下位項目の表記について検討した。項目名は学習指導要領等にある文言をそのまま利用したいと考えた。小学部の下位項目の文言は、解説から抜き出した。例えば、小学部生活科「生命・自然」の下位項目は、内容をイメージしやすい表現として、解説から「動物の飼育・植物の栽培」という文言を転用した。一方、中学部と高等部の下位項目は、解説中にふさわしい表現が見つからなかったため、グループ内で協議し文言を決めた。学びの履歴として活用しやすく、指導する教師がその領域をイメージしやすい表記となるよう検討し、「生命」の下位項目を「植物」「人・動物」，「地球・自然」の下位項目を「天体」「天気」「大地」，「物質とエネルギー」を「化学」「物理」と表記することとした【表－12】。

〔表－12 生活科－理科の項目と下位項目の配置 〕

小学部		中学部		高等部	
項目	下位項目	項目	下位項目	項目	下位項目
生命・自然	動物の飼育・植物の栽培	生命	植物	生命	植物
	自然とのふれあい		人・動物		人・動物
ものの仕組みと働き	季節の変化と生活	地球・自然	天体	地球・自然	天体
	物の重さ		天気		天気
	風やゴムの力の働き	物質・エネルギー	科学	物質・エネルギー	科学
			物理		物理

次に「学習内容表」の内容表記について検討した。ほとんどの内容表記は、学習指導要領に示された内容と同様であるが、段階において内容表中に空白になっている部分には「→」を入れた。

例えば、人の体に関する内容は、中学部1段階と、高等部2段階で扱うこととなっている。もし、内容表どおりに内容を取り扱う計画・授業が展開された場合、中学部1年生で学習し、そ

中学部1段階		中学部2段階		項目 下位項目 A 生命 人・動物 植物	高等部			
中学部1段階		中学部2段階			高等部1段階	高等部2段階		
ア 身の回りの生物 ① 生物は、色、形、大きさなど、姿に違いがあること。 ② 真実や植物の育ち方には一定の順序があること。	イ 人の体のつくりと運動 ① 人の体には骨と筋肉があること。 ② 人が体を動かすことができるのは、骨、筋肉の働きによること。	ア 植物の発生、成長、結実 ① 植物は、種子の中の養分を基にして発芽すること。 ② 植物の発芽には、水、空気及び温度が関係していること。 ③ 植物の生長には、日光や肥料などが関係していること。 ④ 高にのぼるべやめしべなどがあり、花柄がめしべの先に付くためしべのもとが黄になり、真の中心に種子ができること。	イ 動物の発生、成長、結実 ① 動物の発生は、卵か受精卵、卵い受精卵などによって違いがあること。 ② 植物の成長は、暖かい季節、寒い季節などによって違いがあること。	ア 植物の発生、成長、結実 ① 植物は、種子の中の養分を基にして発芽すること。 ② 植物の発芽には、水、空気及び温度が関係していること。 ③ 植物の生長には、日光や肥料などが関係していること。 ④ 高にのぼるべやめしべなどがあり、花柄がめしべの先に付くためしべのもとが黄になり、真の中心に種子ができること。	イ 動物の発生、成長、結実 ① 動物は、卵か受精卵、卵い受精卵などによって違いがあること。 ② 動物の発生は、暖かい季節、寒い季節などによって違いがあること。	ア 人の体のつくりと働き ① 体内に酸素が取り入れられ、体外に二酸化炭素などが出されていること。 ② 食べ物は、口、胃、腸などを通る際に消化、吸収され、吸収されなかった物は排出されること。 ③ 血液は、心臓の働きで体内を巡り、養分、酸素及び二酸化炭素などを運んでいること。 ④ 体内には、生命活動を維持するための様々な臓器があること。	ア 植物の発生、成長、結実 ① 植物の発生は、種子の中の養分を基にして発芽すること。 ② 水、養分及び光には、水の通り道があり、根から吸い上げられた水は茎に導かれ葉から蒸散により蒸散されること。	イ 動物と環境 ① 動物は、水及び空気を通して酸素の循環と関わって生きていること。 ② 動物の間には、食う食われるという関係があること。 ③ 人は、環境と関わり、生きて生活していること。

〔図－31 生活－理科の学習内容表における矢印の表記〕

の後高等部3年生になるまで扱われないという可能性も出てくる。長い学習空白を生み出すことは知的障害のある本校児童生徒の学び方の実態に合っていない。そこで、表中に「→」を入れることで、その間の段階にある生徒についても工夫してその学習内容を取り扱うことが大切であることを示した〔図－31〕。

グループで出た意見・考察等

最後に、生活科－理科の学習内容表作成に取り組んでの気づきをまとめた。

本校は、理科の教科別の学習の時間を設定していない。よって、各教科等を合わせた指導、現状では、特に生活単元学習で学ぶことが多くなる。年間指導計画を立てる際は、理科の内容を適切に取り扱う単元計画を設定することが大切である。在学12年間中に、まったく取り扱わない内容があったり、同じ内容を無計画に何度も繰り返したりすることがないように気をつけたい。

また、ある段階から初めて取り扱うような領域があり、そこで初めて学ぶ「ことば・用語」が出てくる。例えば、酸素や二酸化炭素といった言葉は、高等部2段階の「C 物質とエネルギー」下位項目「化学」の燃焼の仕組みで扱われる言葉である。酸素や二酸化炭素は、普段の生活でもよく耳にする言葉であるにもかかわらず、学習するのは、高等部の最終段階になってしまう恐れがある。これは理科だけの問題ではなく、他の教科についても合わせて考えていかなければならない。酸素や二酸化炭素の文言については、保健体育などでも取り扱われるので、各教科等を合わせた指導の中で、実生活と関連付けながら効果的に学ぶことができるようにしていきたいと考えた。

今回、下位項目の設定や内容の捉えについて、理科の科目の視点で整理したことでスムーズに行うことができた。小学部生活科の内容も、中学部・高等部理科の領域の視点で整理することができることも分かった。小学部生活科は体験活動を中心としている。理科の学習につながる基礎として、十分な体験を積んでおくことの大切さにも気付くことができた。

オ 国語の「学習内容表」作成の取組

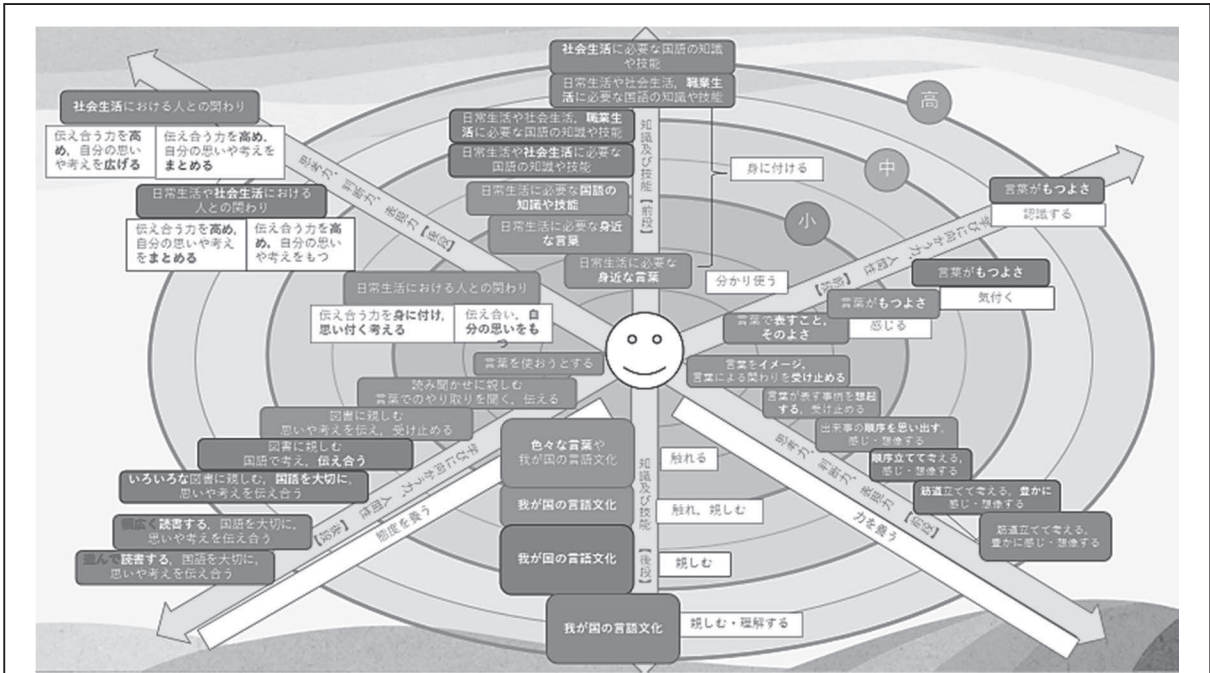
学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループでは、最初に学習指導要領の目標の表記の違いからの段階ごとの解釈を進めた〔図－32〕。

国語における言葉の取扱いについては、言葉そのものから、その前後関係へ、そして文章全体へ広がっていく流れと、段階ごとに「日常生活」から「職業生活」、「社会生活」といった言葉を使う場面性が広がっていく流れが読み取れた。

思考力、判断力、表現力の目標については、「思いをもつ」ことに関して、思いをもつ（内面に）ことから、内面を言葉にして発信し、それが、やりとりという送受信の状況になり、自分以外の考えに触れ、自分の考えを発展させていく流れの中で、言葉によるコミュニケーションの質的な高まりや深まりを目指していることが見て取れた。

次に学習指導要領の内容を精査した。学習指導要領では、国語を「言葉は児童の学習を支える。すべての学習の基盤になる」という教科として位置付けている。それもあってか、学習指導要領で示される内容は幅広く、また文章表記の意味合いが捉えづらいと



〔図-32 国語科の目標の読み取りから見える 学部段階の展開〕

ころがあった。そういった教科の特性を踏まえ、内容を読み込んでいく際にいくつかの点に留意することを確認した。

1点目は、国語科と他の教科との棲み分けの基準を明確にすることである。そこで、本グループでは、内言語にしても外言語にしても、「言葉」そのものに関する学びを「国語」の学習内容と捉えることとした。2点目は、小学部、中学部、高等部のつながりを意識することである。その際、内容的な飛躍がないよう学部・段階ごとの内容を見ていくこととした。3点目は、抽象的表現と具体的表現を峻別し、表現の意味するところを読みとり、児童生徒の学びの姿がイメージできる表現を考えるようにした。

まず、学習内容表の項目について検討した。全体研究で提案された学習内容表の様式には下位項目やさらに詳細な項目を作成する欄はあるものの、それを作成するのは難しく、具体的な項目で示すことが可能な書写のみ作成するに留めた。また、思考力、判断力、表現力については、3つを分割して「思考力」、「判断力」、「表現力」という下位項目を設定しようと試みたが、国語科の内容を読み込んでいく中で、三者それぞれが密接に関連することを確認したため、「思考力、判断力、表現力」と総合的に表記することが適切であると考え、下位項目の設定は行わなかった。その他、「読む」の項目について、中学部段階と高等部段階とでは、「心情・情景物語文」と「事実を捉えて読解していく説明文」が逆に配置されているので、学部間のつながりが分かりやすくなるよう項目を入れ替えた。

学習内容表の作成にあたっては、段階ごとの内容の違いが分かるような表現を意識して、学習指導要領の表現をそのまま残したり、解説等の文言をもとに変更したりした。留意事項に基づく作成について、例えば、1点目の考え方に基づいて、「行動する」と

表記された内容については、国語の内容表からは削除した。これらの内容は、概ね小学部生活科で取り扱うことができるものであり、今後、生活科の内容表に反映するような検討につなげていきたいと考えた。

グループで出た意見・考察等

学習内容表の作成を通して、本グループで考察したことや気付きは、以下のとおりである。

- 言葉は「児童の学習活動を支える重要な役割を果たすもの」、国語は「すべての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるもの」であり、他の教科とは位置付けが異なることとその重要性を再認識した。
- 取り扱う内容は幅広いが、学習内容表では、あくまで「言葉」による理解や表現を重視し、評価すべきであるとした。それに伴う他教科との棲み分けとしては、行動面は生活科、図や絵による表現は図画工作科や美術、職業生活に関する内容であれば中学部の職業・家庭の職業分野や高等部職業で取り扱うことなどが上げられる。
- 国語そのものが、内的な理解や思考などを取り扱っているという特性上、内容が抽象的な表記となっている部分が多く、実際に活用する際は、一人ひとりの児童生徒に合わせて実態の見取りや目標設定をしていく必要がある。
- 特に、高等部2段階の内容を取り扱い、生徒が十分に身に付けるような学習としていくには、教師の教科の専門性が必要になる。
- 学習指導要領で示される指導の在り方が、知的障害のある児童生徒の学び方の特性に合っているのかという疑問がある。例えば、中学部2段階では書写の資質・能力の育成において筆順が重視されているが、障害のある児童生徒の学びにとって、書字における筆順の習得が優先順位として高いのか、など、指導内容の設定に当たっては精査が必要であると思われる。
- 障害の重複・重度化や高等部生徒の軽度の知的障害の増加などの実態の幅広さを鑑みると、小学部3段階中学部2段階高等部2段階の7段階の中で、習得の度合いを丁寧に見ることの難しさがある。1段階の幅が広いことも、学習内容の表記が抽象的になっている要因であるとも言える。
- 現在作成した学習内容表では、個別の指導計画や単元計画の個人目標等にすぐに転用できるほどには洗練されていない。特に国語から外した内容は、他の教科のどこに入っているか、他に重複する内容はないか、また抜け落ちた内容がないか、全教科を俯瞰して整理する必要がある。

今回、学習内容表として小学部、中学部、高等部のつながりを意識した一覧を作成することができた。これを基に1年の学習計画、個別の指導計画への活用に生かせるよう、今後の取組を充実させる必要がある。また、保護者にも分かりやすい指導内容になるよう整理していくことも、説明責任上、今後求められると考える。